

春を探しに
出かけよう!

はるさがし観察会



アオサギ

3月になるとフクジュソウやフキノトウが顔を出し、アオサギが子育ての準備を始めます。

塘路湖に来た春を探しに、ちょっと出かけてみませんか？



キタミ
フクジュソウ



アキタブキ

■日時 / 3月22日(月)

午前10時～正午

■集合場所 / 郷土館

■散策場所 / 塘路湖周辺

■対象 / 一般の方10名

(小学生以下は父兄同伴)

※定員になり次第締め切ります。ご了承ください。

■持ち物 / 寒くない服装

と、多少ぬかるんだ場所でも大丈夫な靴

■参加料 / 無料

■申し込み /

郷土館 (☎487-2332)



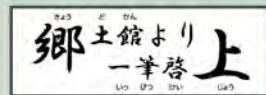
大川のほとり

—郷土館だより(第45号)—

☎487-2332

開館時間

午前9時30分～午後4時30分



今年の冬は大雪になったかと思うと、真冬とは思えない暖かさ。そうかと思うと冷え込む日が続きます。

まだまだ寒いのですが、日の長さが春の訪れを教えてください。

(辻)



釧路集治監教誨師

免囚保護の父

原

胤昭

(前編)

釧路集治監人物伝

12

明治18年に釧路集治監が標茶に設置され、初代典獄(※1)である大井上輝前(※2)の下で、囚人たちは道東の発展に繋がるさまざまな土木・採掘作業を行いました。その一方で大井上典獄は、囚人たちを単なる労働力としてではなく、更生させて社会復帰させることが必要と考えていました。当時としては非常に先進的なこの考えを支え、共に実行した大井上典獄の精神的片腕とも言える人物が、釧路集治監に教誨師(※3)として勤務した原胤昭です。後に「免囚保護の父」と呼ばれた原の原点は釧路集治監であり、免囚保護の歴史において特別な意味を持つ釧路集治監を、原胤昭の人生を通してご紹介します。

原胤昭は、嘉永6年(1853年)に江戸町奉行与力佐久間健叟の三男として、江戸八丁堀南茅場町に生まれました。幼名は弥三郎です。江戸末期の慶応2年(1866年)に母方の原家(※4)を継ぎ、家職を相続して江戸町奉行与力となりました。このとき胤昭は14歳でした。その2年後に明治維新となり、胤昭は東京府の発足と共に役人になりましたが、職員削減に伴い免職となります。その後、胤昭はさまざまな学問を修めました。中でも明治7年にアメリカ人宣教師カロルズ経営の英学校築地大学に学び、その中でキリスト教の洗礼を受けたことは胤昭にとって大きな出来事でした。その後、胤昭は仲間と共に東京第一長老教会独立銀座教会(※5)を創立。さらに同じ年に英書販売店の十字屋(※6)を創業しました。十字屋は明治13年に人に譲り、自身は本や錦絵を販売する天福堂を開店しました。胤昭は他にも女学校や幼稚園の設置、油田開発なども行っています。胤昭の前半生は活発な事業家だったと言えるでしょう。しかし順調に思えた矢先、大きな出来事に襲われます。明治16年に天福堂で販売した福島事件(※7)に関連する錦絵が条例違反等の罪に問われ、胤昭は東京監獄署石川島分署に投獄されたのです。刑期は3カ月であり、このとき31歳でした。

胤昭は、収監中に投獄された他の囚人たちに対してキリスト



▲移築した当初
の郷土館
(当時は外壁が緑色
でした)

40年目の 標茶町郷土館



現在の郷土館▶

郷土館は、昭和44年に現在の標茶高校敷地内から塘路へ移築され、昭和45年6月1日に開館しました。今年、郷土館は開館40年目を迎えます。

始めは少なかった資料もみなさんの協力により徐々に増え、現在では約7万点の自然と歴史の資料を保管し、各種展示や学習に利用されています。みなさんに見守られながら歩んだ40年間に感謝し、今後も郷土館を利用しただけけるよう職員一同お待ちしております。



■名前／オオワシ

Haliaeetus pelagicus

■見られる時期／11月～4月

■よくみつかるところ／河川や湖、海岸

■撮影地／シラルトロ湖

■特徴／水辺近くの木の上に止まっているのをよく見かけます。尾が白いので、オジロワシと間違えそうですが、オオワシは尾だけでなく、肩も白いのです。北海道で冬を越し、来月には北へ帰っていきます。

教のお話をし、そして彼らの身の上話を聞きました。その中で、いわゆる前科者として扱われることから、社会へ復帰するのがとても難しいと知りました。その後、監獄内でチフスがはやり、胤昭は病人の介護に努めましたが、自身もチフスに罹り生死の境をさ迷いました。当時の監獄では病囚にも手荒な扱いが一般的で、病囚を蹴飛ばして動かなければ死んでいると判断していたそうであり、胤昭も一時は死亡したと間違われ屍室に入れられました。この体験から監獄を出た人を保護し社会復帰させるよう導く事業（「免囚保護事業」）や、獄中生活で感じた監獄の改良を考えるようになりました。多くの人を抱える事業家だった胤昭ですが、葛藤の末に商売を止め、免囚保護と監獄改良に生きることにしたのです。

胤昭は出獄後、明治17年に新設された北海道集治監へ送る囚人を一時収容する兵庫仮留監で教誨師として勤務することになりました。当時の仮留監に収容された囚人たちは、集治監に送られる長期受刑者ばかりでした。北海道集治監に送られるという事は「米もできない山の中で、熊や狼の餌食になるのだ」と考えられており、囚人たちは生きるために脱走の事ばかり考えていました。胤昭はこうした状況を目にし、北海道へ送られた囚人の実態を知る目的で、北海道の釧路集治監へ出張します。ここで胤昭は大変な惨状を目撃するのです。

(次号へ続く)



原胤昭が捕まる原因となった福岡事件に関連する錦絵

- ※1 現在の刑務所長であるが、当時は行政も担っていた。
- ※2 受刑者達に犯した犯罪を悔い改めるように指導または囚人の精神的な支えになる役割を担う。
- ※3 原家は桓武平氏を遠祖とする古い家柄で、鎌倉～戦国期にかけて房総に勢力を伸ばした千葉氏の支流にあたる。戦国時代、武田信玄に仕えた原美濃守虎胤や、江戸初期にキリシタンとして処罰された原主水も同族。
- ※4 現在の東京巣鴨教会。
- ※5 現在も十字屋楽器店として残っている。
- ※6 明治15年に起こった大規模な自由民権運動の一つ。河野広中や田母野秀顕を含む6名が国事犯として処罰された。